

松本市教育研修センターだより

No.22 令和6年1月31日

研修も終盤、「学びのコミュニティづくり」を目指して！

松本市が行う独自の教職員研修の中で目指している一つが、「研修を通した学びのコミュニティづくり」です。「悩みや課題をもち改善したい」と願い、研修に参加することで、視野を広げたり、同様な課題をもちながら日々教育実践に励む先生方と対話・協議したりすることを通して、今までの自分をアップデートし、相談でき共に成長する「仲間づくり」の機会になればと考えているところです。今年度実施した研修は70講座以上。いよいよ研修も終盤に近付いてきました。今回は、その中で同じ年代や同僚の「学びのコミュニティづくり」を目指した2講座についてご紹介します。

「自分の成長を振り返り、初任の仲間と共に2年目の課題と目標を明確にする」 市教委主催第2回初任者研修

松本へ赴任した初任者を対象に、市主催の第2回初任者研修が開催されました。今回の初任者研修は、「2年目に向けて」というテーマのもと、教育研修センター長講話・指導主事によるロールプレイを交えた生徒指導研修・互いの実践の成果や課題を発表するグループ協議を通して、初任者の皆さんが教師としての1年間の成長を確かめ合いながら、2年目に向けての課題と目標を明確にすることを目的として実施しました。

教育研修センター長講話では、「自分自身が学び続ける存在になる」「子どもの思いに寄り添い切る」大切さを学び合いました。「自分自身が学び続ける存在」になるためには、「学びを習慣化する・学びを分かち合う仲間をつくる・研修の機会を大切に」の3点について知見を深めました。「子どもに寄り添う」ではなく、「子どもに寄り添い切る」という言葉から、子どもに中途半端に接している自分がいるのではないかと自問する初任者もいました。



【参加者の感想より】

- ◆「どんな教師を目指すか」ということを中心にお話をお聞きし、1年目をあと少しで終えようとするこのタイミングだからこそ、このことを考えることはすごく大切だと感じた。特に私は「学びを習慣化する」というところを課題にしたと思う。毎日の行いが積み重なり習慣となります。私は「子どもたちの気づきを記録する」ことに取り組みたいと思いました。
- ◆「自分自身の学びが、子どもの成長につながる」と聞いて「はっ」とした。自分のための学びであると思っていたが、目の前の子どもたちのために学び続けなければいけないと思った。一日一日小さなことから学べることを探して学び続けたい。

生徒指導研修では、授業中、教師に隠れてタブレットでゲームをしている子どもにどのように対応するか、実際に「教師役」「子ども役」「観察者役」に分かれて、ロールプレイを通して、「自分ならどのように対応するか」「注意された子どもはどんな気持ちでいるか」等について考え合いました。

【参加者の感想より】

- ◆具体的な場面を基にグループでロールプレイをしてみたことで、自分の指導の仕方の良い部分と課題が他者の視点を通して明らかになった。子ども観によって子どもに対する指導の言葉や行動が変わってくることがわかったので定期的に省察していきたい。

グループ協議Ⅰでは、小学校は学年別、中学校は教科別に分かれ、約60分間、用意した板書写真をタブレット等で提示しながら交代で自分の実践を語り合いました。仲間やアドバイザーからの助言に熱心に耳を傾け、自らの授業実践を振り返り、もっとこうやっていこうと次への期待・改善点に気づき、希望溢れる表情に変わっていく初任者が大勢いました。中学校の教科指導には、アドバイザーとして教科等研究推進教員の先生方6名（国語・社会・数学・英語・音楽・技術）にも参加いただきました。（次ページへ）

【参加者の感想より】

- ◆他校の同じ学年の先生方の実践を聞き、質問等までできる機会はあまりないので、とても良い機会となった。また、同年代の先生が、頑張っている姿を見て、良い刺激になった。負けずに頑張りたい。
- ◆日頃、技術の授業で不安に思っている授業の進め方や工夫などについて大変参考になりました。アドバイザー（教科等研究推進教員）の M 先生に 1 対 1 でご指導頂き、大変貴重な機会となりました。ありがとうございました。

グループ協議Ⅱは、4 人グループになり学級経営・生徒指導等で、4 月からの自分の成長の姿や今後の課題・目標について小中別に分かれ語り合いました。「自分と同じ悩みを抱えている仲間がいることを知り、自分も頑張っていこう」と意欲をもつ初任者の姿が印象的でした。

【参加者の感想より】

- ◆それぞれの先生方が自分のクラスの子どもたちを理解して、「よりよりクラスにしよう！」とする気持ちが伝わってきました。悩みを共有すると「心が軽くなる、力が湧いてくる」というのを感じました。
- ◆それぞれの先生が異なる悩みなどがある中で、日々取り組まれていることを知ることができた。自分は自分の中で大切にしていることを持ちながら「がんばろう」と思えた。

「子どもを『対象』として見て外から統制するのか、内側でつながり合い響き合う『共に歩む存在』としてかかわり合うのか」

埼玉大学 岩川直樹先生による訪問型研修（市立学校教職員研修）

今年度は梓川小・鉢盛中・開明小・本郷小・二子小を訪問しての岩川直樹先生（埼玉大学）・中村麻由子先生（大東文化大学）による研修が行われました。ご講演とともに『からだ』と『ことば』のレッスン（竹内敏晴氏考案）が行われた学校もありました。自分のからだのこわばりや歪みに気づき、心を解き放ち、他者との関係性の中から生き生きとした言葉を取り戻すことを体験するレッスンでした。



【参加者の感想より】

- ◆体験を通して、内を感じるから外を感じ、外を感じるから内を感じる…この感覚をいつも大事にしていきたいと思いました。子どものせいにするのではなく、我が身に返せる教師でありたいと思います。
- ◆子どもを見ると、子どもの事実だけでなく、子どもと向き合う自分の事実も見ているかということ。子どもと関わる自分をつい切り離してしまいがちだが、子どもと教師の間で何が起きているのかを見つめ直すことの大切さを学びました。

ご講演とレッスンを通して、外からの統制ではなく、内側でつながり合い響き合う教師と子どもの関係性について岩川先生に教えていただきました。モノサシをあてがってあれこれを評価するかかわり合いではなく、互いに相手になってケアをするかかわり合いこそが教室の風土をつくることを学びました。

感想発表の際、ある先生が勇気を出して、「これまでの私は A さんのことを『困った子』『なんとかしなきゃいけない対象』として見ていた。そう見てはいけないと思いつつ、夢にまで出てくる A さんへの対応に、本当にどうしたらいいか・・・」と語り始めた時のことです。言葉を振り絞りながらの語りを、同僚の先生は自身の下唇を軽く噛みながら聴き入っていました。その同僚の先生にとっても重なる経験があったのでしよう。まさに、教師同士においても内側でつながり合い響き合う職員集団の風土があることを垣間見たひとときでした。

最後は、訪問校の教師と教師の温かな同僚性を価値つけていただき、次の言葉で締めくくられました。

（一部抜粋）

自分とは異なる存在へのリスペクトによって、はじめて他者が現れる。
自分と異なるその他者とともに歩もうとすること、
その中でしか感じられない気づきがあり、そこからしか生まれない言葉がある。